

欧米の独立系石油会社



ノースダコタ州にある Tesoro の小さな製油所で バイオジェット燃料を製造する計画が

石油精製販売会社 Tesoro(本拠地:テキサス州サンアントニオ)が、製油所の買収を開始することを決めたのは 1998 年です。

そして BP が売りに出したユタ州の Salt Lake City 製油所(原油処理能力 55,000 bpd)およびノースダコタ州の Mandan 製油所(同 60,000 bpd)を 2001 年に入手しました。

Mandan 製油所はノースダコタ州で唯一の製油所で、Tesoro は同じ年に BP から同製油所で処理する原油を集荷するパイプラインも買収しています。

同州にはほかに原油を集荷するパイプラインが無く、州内の石油生産者は原油を Tesoro に販売する以外に方法がありません。

Tesoro は地元の比較的低硫黄の原油を WTI よりかなり安い価格で購入しています。例えば、「WTI がバレル 40 ドルを少し下回った時期にバレル 25 ドルを切る価格で購入して」(2008 年 12 月 26 日、Associated Press Newswires)います。

この製油所に

バイオジェット燃料を製造するパイロット設備を建設する計画が 3 月に公表されました。

ノースダコタ大学で開発された製造技術を採用し、クランベの油を主原料にします。クランベはアブラナ科の植物で、北米の高原で小麦の輪作作物として栽培できるそうです。

バイオジェット燃料の米空軍への納入を目指しているようです。

米空軍は

輸入原油への依存から脱却するため石油代替燃料の導入を真剣に考えています。

米国に豊富にある石炭から Fischer-Tropsch プロセスで製造する CTL (Coal-to-Liquids) に取り組んでいます。

しかし今年になって政権が変わるとバイオジェット燃料にも関心を持つようになりました。

提案を公募して 2 種類の再生可能ジェット燃料を選定して、それぞれまとまった量を購入し、試験飛行を含めたバイオジェット燃料の認証のための各種試験に使用する予定です。

2013 年には軍用機が通常のジェット燃料にバイオジェット燃料を最大 50% 混合した燃料を使用できるように、今後 2~3 年をかけて認証作業を進めます。

購入する燃料は、「規格に合格するだけでは不十分で、生産が持続可能であり、必要な製造能力があること」(2 月 10 日、Flight International) が求められます。

特に燃料の種類にはこだわりがあり、「大豆油やパーム油などを原料とするものは視野にない」(2 月 20 日、Inside the Air Force) ようです。

カメリナ、クランベ等の国内で生産できるエネルギー作物あるいは藻を原料にしたバイオジェット燃料が候補です。

カメリナもアブラナ科の植物で、北米の高原で栽培できます。

この 1 月の「JAL バイオ・フライト」で使用されたバイオ燃料の原料のひとつとして内外に知られています。

ひとこと

米空軍は、CTL を 2011 年に使用できるように認証作業を進めていますが、民間航空は既に南アフリカのエネルギー・石油化学会社 Sasol が製造する CTL を使用できます。

米空軍は、バイオ燃料を 50% 混合したジェット燃料の使用の目標を 2013 年としています。民間航空は軍より先に使用できるようになると考えられます。

Mandan 製油所の計画が前進するか否かが明らかになるのは 6 月頃だと思いますが、そのほかの米国の石油会社もバイオジェット燃料の製造を検討しているのではないのでしょうか。

(YY)

(Web 公開)「世界のエネルギーの話題」(2009 年 4 月 21 日)

本レポートは、世界の 2500 紙以上の新聞、5500 紙以上のビジネス紙および業界紙、600 以上のニュースワイヤー(速報)/プレスリリース等を検索できるファクティバ(ダウ・ジョーンズ社のデータベースサービス)を利用して入手した多数の記事、レポートを比較、分析して執筆しています。(山崎由廣)